

と く  
徳

ほ う  
朋

## 故郷から迷い出て

くるべ しんゆう  
訓覇 信雄



くるべ しんゆう  
1906-1998  
三重県出身。元真宗大谷派宗務総長、真宗大谷派金蔵寺元住職。

十分なたとえじゃありませんけども、わかりやすいように例をあげていうと、赤ん坊が生まれればばらくすると、自分だという事を知ります。つまり我ということを知ります。けれどもそれが十歳くらいになると、ぜんぜん変わってくる。はっきり自我という分別が出来る。自他の区別が出来てくる。松の木や家も皆我に対するもの、相手になる。自我中心だから自他の区別に立つことによって、自分の我が一番大事だと、こういうことになってくるんです。一切が対立する世界、自他別の世界、そういうものを十歳くらいになるとはっきり自覚してくるんです。そうすると人間は、どうやらあれも**分別**がついてきたという。

それは何かというと、ようやく迷うようになったという事です。自分、自分と思っているけれど、捜してみるとそんなものはないでしょう。そう思っていることがあるだけ。それは思いであって、我は自分でないんです。我はどこまで伸ばしていっても自分ではない。我を伸ばしてきたのが**流転**の歴史です。いつも同じところを回ってきたんです。百年や二百年じゃないんです。自転車の車輪のように回って百年どころではない。何万年何億年ときたんでしょ。つまり**流転**してきた。だからもう目が回ってしまっているんです。だから何が本当か、何が間違いかわからんようになっているんです。そのために、我によってだまされている**娑婆**というものを、自分の本国だと思つとる。**娑婆**が本国だと思つとるから**往生浄土**という話を聞くとどこかへ往くんだと思

う。「往」という字は「ユク」という字だ。そうではない。帰るんです。「きみょうむりょう帰命無量」というでしょう。迷い出してきたんだ。我にだまされて、故郷から迷い出しておるんです。それがしゃば娑婆というところですよ。それが長いもんだから、しゃば娑婆が自分の国だと思っている。これが自分の国ならたまったもんじゃないですよ。このごろ若い者が人生とはこれだけのものかという。(中略) れんによ蓮如上人はしゃば娑婆を不定ふじょうのさかい、夢幻だといわれるが、そういうことを大人はわからんから教えるわけにいかん。けれど若者はどうも夢幻じゃないかと思うんでしょ。大人の考えているようなしゃば娑婆しかないのなら、お先に御免とって自らたくさん死んでいった。痛ましい話です。

親鸞聖人のご門徒で教えを聞いた人は、そういうことをはっきりと教えてやらねばならん責任がある。おうじょうじょうど往生浄土の道があるということですよ。しゃば娑婆は夢幻のさかいであって、人間の思いが作っている世界です。思いをこえて如来えこうの廻向の信心にあえば、なるほど夢であったと納得できる。そういう浄土にふれると、本当の生き甲斐、人間に生まれてよかったということがわかる。それを教えてやらねばならんのです。



『死して生きる』

### 語注

るてん流転・・・迷い続ける事。本当ではない事を本当だと思ひ込み、むな虚しさから離れられない。

しゃば娑婆・・・私たちが生きる損得や利害関係に侵された世界。かんにんど堪忍土とも言う。

私たちは成長して知識や知恵が付いていくにつれて、人間本来の在り方から離れていく事を仏さまは悲しんでいます。そんな事には気付かずに一生懸命生きている私。本来の在り方に「帰る」ことが願われています。(哲弘 拝)

この「とくほう徳朋」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。